

生活支援記録法（F-SOAIP）の記入法

F	Focus（フォーカス、焦点）：着眼点（ニーズ、気がかりなど）
	<ul style="list-style-type: none"> ●記録した場面の内容が一目で分かるよう、その場面を短い言葉で記入します。 ●ケアプランにあがっている目標や課題の番号とできるだけ連動させましょう。 <p>例 自己判断によるリハビリの中断対応</p> <p>例 辛い体験の振り返りによる受容</p>
S	Subjective Data（主観的情報）：利用者の言葉
	<ul style="list-style-type: none"> ●利用者の言葉を記入します。 <p>例 S：母が待っているので、直ぐに帰らせてもらいます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ●利用者と同席し、利用者と同様に家族の発言が重要な場合には、家族の場合、「S（続柄）」のように記載しても構いません。 <p>例 S（長女）：父が多少嫌がってもリハビリを勧めて下さい。</p>
O	Objective Data（客観的情報）：観察や他者から得られた情報、他職種の行為
	<p>例 O：長男よりお気に入りの本が届いていた。</p> <p>例 O：相談員Sさんが、外出中の話をすると笑顔になっていた。</p>
A	Assessment（アセスメント）：気づき、判断
	<p>例 A：食後直ぐにに口腔ケアを行えるようセッティングすることで、座位でできるのではないかと。</p>
I	Intervention/ Implementation：援助者（記録者本人）の対応、介護、声かけ
	<p>例 I：手をつないで風呂場まで、温泉の話をしながら行く。</p> <p>例 I：「歌の後に歯磨きをしましょうか。」</p>
P	Plan（計画）：当面の対応予定
	<p>例 P：毎食後、声かけして口腔ケアを実施する</p>

ポ イ ン ト

■生活支援記録法を用いる場合でも、叙述体の記録と併用可能です。

■すべての項目を網羅する必要はありません。

■記号は、順序など柔軟に用いることができます。

例 O：午前中より、トイレ希望のコールが頻回にあり。
 S：「またトイレに行きたい、お願いします。」
 A：不安が見られるも、時間の理解は可能か？
 I：時計を目の前に置き「〇〇時になったら、行きましょう。」と伝えて様子を見る。
 S：「了解しました。」
 O：時計置いた後は、コール回数が半分程度となる。
 ※このように、1つの場面の中に同じ項目を繰り返し用いることができます。
 しかし、項目の繰り返しを多用すると逐語記録と同じようになりますので、重要なやりとりだと思われる「S」や「I」に限定するとよいでしょう。

例 O：思うように頭が上がらず、(軽介助)端座位となった。
 ※（ ）内は「I」に相当するものですが、利用者の状態の変化と切り離すことができないため、あえて「O」の中に（ ）書きで表示しています。

■記録内容を分けがたい場合には、2つの項目を「/」（スラッシュ）を用いて一緒に記録することもできます。

例 S/O：臥床後コールあり。「起きられなくて」との訴え。
例 AI：眠気がなさそうなので、フロアで会話をした。
例 AP：他の利用者のこともきにかけている様子なので、次回も他の利用者との交流を図る。
例 IP：本日始めた歩行訓練が上手くできていたので、お部屋でも試してほしいと利用者に話したことを、担当介護職に歩行中の写真を添えて伝える。

生活支援記録法（記録例）

月/日	時間	#	項目	経 過 記 録
〇/〇	〇:〇		S	トイレに行こうと思って動いたら、うまく動けなくて転んじやった…。
			O	部屋へ行くと、ベッド脇に座っている。どうしたのか聞くと、上記のように答える。
			A	1人で車いすに乗ってトイレに行こうと思ったらしい。 現在リハビリテーションを行っているが、筋力低下のため立位時にふらつきが見られ、移乗動作には腰を支える程度の支援がないと、今後も転倒の可能性が高い。 移乗動作が安定するまでは、職員を呼んでもらい、支援を提供していく必要がある。
			I	外傷を確認したところ、特になし。体を支え、立位を取りベッドへ座ってもらう。本人へ、乗り移りする際は職員を呼ぶよう声かけを行う。
			P	移乗動作時は職員を呼ぶよう介護計画を立案する。

■記録を活用する時のポイント：日付とFの項目に目を通すと、経過を追うことができます。